

『天台四教儀』と『天台八教大意』

三 友 健 容

序

諦観は天台教学を述べるにあたって、これを『天台四教儀』（以下、『諦観録』と称する）と名づけた。これに類する題名のものに、智顛の『四教義』がある。智顛の『四教義』は12巻もある大作で、本来は『維摩経』に智顛が註釈をした『維摩経玄疏』のことである。智顛はのちに隋の煬帝となる晋王廣のため開皇15年（595）に『維摩経玄義』（『浄名玄義』）十巻を撰述し献上している。その内容は天台第六祖妙楽大師湛然（711～782）が「四教六巻」「四悉両巻」「三観両巻」といつているから、このうちの「四教六巻」がのちの『四教義』12巻になったものである。そこで諦観の『天台四教儀』と区別するために、智顛の『四教義』を大本あるいは大部『四教義』ということにしている。智顛本人の著作は決して多くはなく、重要な天台三大部である『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』でさえも弟子の灌頂が筆録し編纂したものである。大本『四教義』のもととなる『維摩経玄疏』は智顛自身が再三にわたって推敲しているから、この大本『四教義』は智顛自身の教理を知る上で極めて重要な書物ということになる。諦観は智顛の『四教義』の名称を使わず、「義」を「儀」としている。諦観が「儀」を使ったのは、有名な五時八教判のなかの「化儀の

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

四教」の「儀」ということを意識してのことであろう。

伝説によると、唐代の兵乱で多くの天台書籍が散逸し、呉越の錢忠懿王が国を治める傍ら『永嘉集』を読んでいたところ、「同除四住」の言葉にあたり、国師である徳韶に尋ねたが解らず、天台山の螺溪義寂法師（一〇〇〇）が教法に明るいから、義寂に訊いた方がよかろうと答えた。義寂に訊いたところ、これは『法華玄義』の一節であるが、残念ながら焼失してしまっていて今に伝わっていないという。そこで忠懿王（AD.929 - 988）は高麗と日本に贈り物を持たせて使者を派遣し、『法華玄義』など焼失した書籍を求めたところ、高麗からは諦観が多くの書籍をもってやってきて（AD.961）、天台山に数年留まり入寂した。没後、遺品を納めた篋かから光りを発するものがあり開けてみると、それが『天台四教儀』であった。その来由を籠めて文中に「同除四住」の言葉が書きとどめられているとする。

この書の価値について一言すると、天台学を学ぶ初学者にとって『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』のいわゆる天台三大部と湛然の註釈を併せ読んで理解することは並大抵な努力ではできない。その点、灌頂（671-682）撰といわれる『天台八教大意』や『諦観録』は初学者を利するところが多かったに違いない。ところが、『仏祖統紀』は諦観が『天台八教大意』を刪補せんぽ（削ったり補ったりすること）し、『天台四教儀』を撰述したとして、『諦観録』の評価を下げている（大正蔵49.269b）。確かに諦観は天台三大部と『維摩経玄疏』をもとに『天台八教大意』を骨格として天台教学の要点を纏め初学者の便に供したことは間違いないだろう。また関口真大博士によって「五時八教判は天台教学にあらざ」と発表されるや、多くの天台学者によって論争され、この『諦観録』の価値そのものも揺らいだことは記憶に新しい。

ところで、間もなく全巻を読破するが、有志による『法華玄義』講読会を永年続けているうち、参加者の一人であ

窪田哲正博士より、『天台八教大意』の作者問題について問題が提起され、往復問答をしているなかで、『諦観録』との関係など多くの問題点が浮上してきた。そこで、『諦観録』と『天台八教大意』との関連から、この『天台八教大意』の著者問題などについて、研究の一端を述べようとするものである。

1 『天台八教大意』の著者と題名

志盤の『仏祖統紀』(大正蔵49:206)²⁾は、諦観が湛然の『八教大意』を加筆修治して『天台四教儀』を著述したのに、先駆者湛然に触れず前人の功績を無視したと批判している。ところが、『佛祖統紀』「東土九祖紀」湛然の著作には

所著法華釋籤。文句記。止觀輔行。止觀搜玄記。各十卷。止觀文句一卷。為司封李華說。止觀大意一卷。釋籤別行十不二門。金剛鉅論。止觀義例。三觀義涅槃後分疏。觀心誦經記。授菩薩戒文。始終心要。各一卷。略淨名疏十卷。記三卷。淨名廣疏記六卷。治定涅槃疏十五卷。文句科。止觀科。各六卷。華嚴骨目二卷。法華三昧補助儀。觀心補助儀。各一卷。方等懺補助儀二卷。³⁾

とあり、『八教大意』に該当するものがない。また、おなじく『佛祖統紀』「山家教典志」には、

玄義釋籤(十卷) 文句記(十卷) 止觀輔行(十卷今開二十卷) 止觀義例(一卷慈雲云為初學難解及破異論) 止觀大意(一卷為司封李華出) 維摩略疏(十卷略智者維摩文疏) 維摩廣疏記(六卷。慈雲云。對廣文雖少殊亦釋義宛合) 金剛鉅論(一卷。明涅槃佛性義。已上四十九卷。同入大藏) 始終心要 十不二門(釋籤部外別行) 止觀搜要記(十卷) 涅槃後分疏(一卷亡) 觀心誦經記(一卷亡) 三觀義 授菩薩戒文(亡) 止觀文句(一卷亡)

『天台四教儀』と『天台八教大意』(三友)

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

華嚴骨目（亡）。今東山有板。二卷是海東復還者）法華補助儀方等補闕儀

とあり、かなりの書籍が失われていると伝えているが、ここにも『八教大意』は見あたらない。ただし、この題名に類似するものとして、『天台八教大意』があり、大正新修大藏經の第46卷諸宗部に収められているが、そこには、

天台八教大意 隋天台沙門灌頂撰（大正藏46.769a）

とあり、章安灌頂が撰じたことになっている。そして、文末には

天台釋明曠於三童寺錄焉（大正藏46.773c）

となっているから、天台僧の明曠が三童寺で録したこととしている。

それでは、明曠とはいかなる人物だったのであろうか。『仏祖統記』によると、

禪師明曠。天台人。依章安稟教觀。廣化四眾專誦法華。章安撰八教大意。師首於三童寺錄受。平時著述甚多。今所存心經疏耳。⁽⁴⁾

とあり、灌頂から教觀二門の教えを受け、ひろく法華を誦誦して衆生を教化し、章安灌頂の撰じた『八教大意』を三童寺で記録したことになっている。⁽⁵⁾そして灌頂(361-632)のもとには嘉祥大師吉藏も明曠とともに座を連ねている。⁽⁶⁾この記述を信じれば、明曠は灌頂とほぼ同時代か、灌頂よりも若いと考えられる。

また明曠の著作とされているものとして、『天台菩薩戒疏』明曠刪補（大正藏40）、『般若心經略疏』（統藏26）、『金剛鉅論私記』（統藏56）が現存しているが、『伝教大師将来台州録』には、そのほかに、『妙法蓮華經大意』、『摩訶止観八教大意』がある。⁽⁷⁾このうち『妙法蓮華經大意』は、湛然の『法華經大意』として現存しており、この書を指しているものと思われるから、記述に混乱があり、明曠は湛然の『金剛鉅論』に対して註釈をしたこととなってしまい、灌

頂の時代の明曠とは別人となる。日本の辯才が会本とした『金剛鉅論私記会本』には、『金剛鉅論』は荊谿大師が撰し、門人の明曠が記したと伝えているから、もし明曠が荊谿湛然(711-782)の弟子であるということになると、灌頂の時代とは隔たりがあることになる。また一方、『天台菩薩戒疏』は智顛の講義を灌頂が記した『菩薩戒義疏』に明曠が刪補したものであるから、この著者を章安門人の明曠とすれば、湛然時代の明曠とは別人となる。上杉文秀氏は『八教大意』は章安の作ではなく、荊谿の門人明曠の撰であり、大正大藏経などが章安の撰としているのは、義天目録が誤り、それを『仏祖統記』が伝えて誤謬を来たしたとし、⁹⁾ 中里貞隆氏も継天の『八教大意便蒙』の論証によって、これを支持し、¹⁰⁾ 池田魯參氏も、明曠の三つの著作を詳細に検討した結果、三者は密接な関係を有するものとして、これを追認している。

ところが、窪田哲正氏は叡山文庫のなかから『八教大意扶講記』を探し出し、その巻末に、天台山沙門可秀の「八教大意撰人辨」があることを発見した。天台山沙門可秀が如何なる人物であるか明らかではないが、「宝永乙丑冬日」¹¹⁾とある。なんとそこでは、先ほどの学者よりも遙か以前に、詳細に著者問題を論究している。それによると、

①慈雲の『教観目録』¹²⁾には『八教大意』は欠本とあり、義天『教蔵総録』¹³⁾、『釈門正統』、『閲蔵知津』は、『八教大意』は章安灌頂が撰したとあり、現行『八教大意』篇末には明曠録とあり、湛然の撰としている。これを確認すると、義天『教蔵総録』¹⁴⁾には「灌頂述」とあり、『釈門正統』(統蔵[5:270a])には「八教大意一卷」とのみあって著者名がなく、『閲蔵知津』(統蔵[2:168b])は、章安灌頂が撰したとあり、現行本『八教大意』の篇末に明曠録とあり、湛然の撰としている。

②隋唐時代の浄土寺の明曠は、道岳の伝に係わっており、章安の弟子ではな¹⁵⁾。(『統高僧伝』大正蔵[50:527b])

③元浩の伝では、「行滿道暹明曠皆著述廣天台之道」（『宋高僧伝』大正蔵50,740b）とあるから、行滿、道暹、明曠は同時代となる。

④それゆえに、良諸（？）も未詳とし、『佛祖統紀』の所述に疑いをもっている。

⑤幸いに日本では古書が存在しており、『梵網疏』に「大曆十二年（777）三章寺（15）において記す」あり、これは灌頂の滅後二百年後となり、湛然の滅後より5年前となるから、章安門下の明曠と湛然門下の明曠とは同一人物ではない。

⑥この紀年から智証大師円珍は、湛然の弟子であるとしている。円珍の説は唐の地での伝聞によるから信用できる。（『観普賢経記』大正蔵56,251c）

⑦『金剛鉤論私記』に「初心畢竟具性俱融境圓智圓修圓性圓故名為圓略示旨歸具如別說也」（大正蔵56,52c）とある「旨歸」とは湛然の『八教大意』のことであるから、この『金剛鉤論私記』と『八教大意』の著者とは同一人物である。¹⁶

⑧『八教大意』の「九會」「宝積」などの語は唐訳であるから、唐代の撰述となる（しかし、これを確かめると『大寶積経』は唐の菩提流支訳であるが、「九會」は『國清百録』に「普禮十方三世諸佛七處九會圓滿頓教盧舍那佛」（『國清百録』大正蔵46,795b）とあるから、「九會」に関してはあたらなご。）

⑨六即の二字を解釈するのは、湛然の『止観大意』によるものであるから、章安の所撰とすることはできない。章安の撰としたのは、軽薄のものが行つた結果である。

として、湛然門下としている。また継天の『便蒙¹⁸』は、

①明曠は湛然の門人であり、『佛祖統紀』が誤って章安門下としたものである。章安に『八教大意』があるという伝説により章安にしたものである。

②『佛祖統紀』に「首（はじ）めて録す」とあって明曠の功としているが、わずか二十紙ばかりであるのに、このように功を誇るのは章安の門人のするところではない。荊谿の門人であっても「首めて録す」というのは当たらないが、諦観のように単に録すとするならば「撰録」として妥当である。

③三童寺は三章寺の誤りであろう。

④題名の下に明曠の名がなく、文末にあるところから、後人が付加したものであろう。

⑤義天の「教蔵目錄」の三に、「八教大意一卷灌頂述」とあるが、義天の誤記である。

⑥『佛祖統紀』は荊谿の『八教大意』を諦観が略して修治し名前を変えてしまつて前人の功績を没し深く可とすべからずとしているが、この荊谿の二字はおそらく誤写であり、章安とすべきであり、『八教大意』と『諦観録』とはおおいに異なっており、修治を加えたというべきではない。『佛祖統紀』は粗略であるから、明曠を認め、章安としてしまっている。

としている。継天の『便蒙』は宝曆10年(1760)の紀年があるから、可秀より後の僧であるが、可秀の説を踏襲していないから『八教大意』著者問題に対して、その当時かなり関心が深かったことが伺われる。

また、『八教大意』の書名について調べてみると、

○『佛祖統紀』章安の項では、「所著八教大意。智者別傳。各一卷。」(大正蔵49,186a)とあり、明曠の項では、「章安撰八教大意」(大正蔵49,202a)、章安の項では、「八教大意(一卷)」(大正蔵49,259a)、諦観の項では、「高麗(觀

師）四教儀（一卷依章安八教大意刪補）」とある。

○『伝教大師將來台州録』では、摩訶止観八教大意一卷（荊溪沙門明曠述）（二十五紙）

○『天台宗章疏』では、摩訶止観八教大意一卷（明曠述）（大正蔵55.1135c）

○『東域伝灯目録』（大正蔵55.1149b）とは、同（止観）八教大意（明廣撰）（大正蔵55.1162a）

○義旭『教蔵総録』では、八教大意一卷（大正蔵55.1178a）著者名なし。

○智旭『閲蔵知津』では、『天台八教大意』（灌頂撰）（嘉興蔵31.793c、嘉興蔵32.168b）

とある。以上の記述を検証した結果、現存する『天台八教大意』は、灌頂のものではなく、湛然の門人の明曠が撰したものとなるが、ここで問題がひとつ残る。それは、経録の伝えるところの灌頂撰『摩訶止観八教大意』である。灌頂門下説を採る主張では、明曠は灌頂より教観二門の伝承を受けたという記述があり、ほとんどの経録の伝承が『義天録』の誤りを踏襲したとしているが、灌頂門下説を間違ひであると言い切れない余地も残している。現行本は、とても『摩訶止観』を主とした八教の大意とはおもえないから、ことによると、章安撰の『摩訶止観』の八教大意が存在したが伝わらず、これと現行本の明曠の『八教大意』とを混同してしまったために、現行本に灌頂撰と記してしまつた可能性も否定できない。そうなると、灌頂門下の明曠と湛然門下の明曠とは別人ということになる。また、大正蔵に納められている『八教大意』にも『菩薩戒疏』にも、『天台』が冠せられているが、『閲蔵知津』を除いた経録にはついていないことから、この二書は明曠の撰述であるために、刊行するときに、附けられたものとおもわれる。

2 『天台八教大意』の教判論

池田氏は、『諦観録』と『八教大意』とを比較対照して『諦観録』の特色を八点に整理されているので、これを参考に『八教大意』の教判論を検証することにする。さて、『八教大意』の著者が湛然門下の明曠であるとする、湛然教の影響を検討してみると、著者がより明確になるかも知れない。湛然の教学については日比宣正先生のご研究があり、湛然の特色の一つとして、『法華経』を化義・化法の四教を超越したものと位置づける「超八醍醐」思想があげられる。

『八教大意』には「法華涅槃非頓漸攝」という文章がある。「非頓漸攝」という用語は『法華玄義』にも出てくるが、その場合には、仏性常住を明かす經典として『勝鬘経』や『金光明経』を述べている箇所であり、南三北七のひとつの異解であって、智顛の考えではなく、「非頓漸攝」は『法華経』を意味していない。池田氏は、『八教大意』のこの文章のあとに、「余の六教は遍に漸頓の中に在り。同聴異聞して互いに相知らざるを秘密教と名づく。同聴異聞して彼此相知るを不定教と名づく」と続いているところから、『八教大意』は頓漸秘密不定の化儀判の範疇を前提にし、そのわく組みのなかで法華と涅槃の「非頓漸」をいうのであるとする。しかしながら、『八教大意』のいう「余の六教」とは、法華・涅槃を除いたところの化儀・化法の「六教」を指しており、池田氏の見解とは異なり、法華・涅槃を別扱いする、湛然とおなじ「超八醍醐思想」であることがわかる。この「六教」の考え方は、『金剛鉈論私記』にも出てきており、『八教大意』と『金剛鉈論私記』とが同一の著者明曠であることを暗示している。

池田氏の指摘の第四には、菩薩論では、『諦観録』がほぼ『八教大意』の説そのままを承けているとする。確かに、

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

『八教大意』と『諦觀錄』の四弘誓願は、『法華經』に述べられている未度・未解・未安・未得を四弘誓願にあて、さらに四諦にあてるもので同じような内容であるが、これは智顛の『次第法門』の所説によるものであるから、『諦觀錄』が智顛教学を整理したものである以上、諦觀がこれを採用するのは当然である。また池田氏は、菩薩の發心と三阿僧祇劫百大劫の修行論の説明が、『八教大意』と『諦觀錄』とが相似していると指摘するが、『諦觀錄』は『俱舍論』、『大毘婆沙論』、『輔行』の菩薩論によっており、『八教大意』もおなじくこれらを参照しているために、双方とも類似した説明をしているのであって、諦觀が『八教大意』を参照したことは認められても、そのまま引用したものは言えない。

つぎに第八の指摘は「通教」の説明の相似である。この箇所は他の論書に似た説明が見られないから、諦觀は『八教大意』を参照したものと認められる。また通教とは三人の因果が大同だからであるという説明は、『菩薩戒疏』にも一致するから、『八教大意』が『菩薩戒疏』の著者と同じであることを暗示している。⁽²⁶⁾

第九の指摘は、別教の説明の相似である。『八教大意』は「三明佛敎者。此約界外獨菩薩法。教理智斷行位因果別前二教別後圓教。故名為別。涅槃云。四諦因緣有無量相。非諸聲聞緣覺所知。諸大乘經廣明菩薩歷劫修行。行位次第五不相攝並此教也。華嚴明十住十行十迴向為賢。十地為聖。妙覺為佛。瓔珞明五十二位前加十信。仁王不論等覺但五十一位。金光明經但出十地佛果。勝天王但明十地。涅槃明五行十功德。既是界外菩薩行位。隨機利益豈得定說。今約瓔珞總明七位。一十信。二十住。三十行。四十迴向。五十地。六等覺。七妙覺⁽²⁷⁾」とし、『諦觀錄』も「次明別敎者。此教明界外獨菩薩法。教理智斷行位因果。別前二教。別後圓教。故名別也。涅槃云。四諦因緣有無量相。非聲聞緣覺所知。諸大乘經。廣明菩薩歷劫修行位次第五不相攝。此並別教之相也。華嚴明十住十行十迴向為賢。十地為聖。妙覺為佛

繆絡明五十二位。金光明但出十地佛果。勝天王明十地。涅槃明五行。如是諸經增減不同者。界外菩薩隨機利益。豈得定說。然位次周足莫過繆絡經。故今依彼略明菩薩歷位斷證之相。以五十二位束為七科。謂信住行向地等妙^①」として、
るから、双方の説明は極めて類似する。このような説明は智顛、灌頂、湛然の現存資料には見あたらないから、諦観は『八教大意』を参照して、別教の説明をしたものとおもわれる。

つぎに第十の指摘は円教の説明である。『八教大意』には「次略明圓教者。圓名圓妙。華嚴法界廣大。淨名入不二法門。般若最上之乘。涅槃一心五行等。並圓妙法也。此等圓妙一理無他兼帶半滿。權覆於實旨趣猶隱。今從佛意卷權歸實。開顯之圓粗騰綱要。即以法華分別功德品末。明本迹流通如來滅後。五品間經轉說起觀行成。以為凡地措心之首。」とあり、『諦観録』には「次明圓教者。圓名圓妙圓滿圓足圓頓。故名圓教也。所謂圓伏圓信圓斷圓行圓位圓自在莊嚴圓建立眾生。諸大乘經論說佛境界。不共三乘位次。總屬此教也。法華中開示悟入四字。對圓教住行向地。此四十位。華嚴云。初發心時便成正覺。所有慧身不由他悟。清淨妙法身。湛然應一切。此明圓四十二位。維摩經云。蘆菴林中不嗅餘香。入此室者。唯聞諸佛功德之香。又云。入不二法門。般若明最上乘。涅槃明一心五行。」とある。この一致点は他の文献に見あたらないから、明らかに諦観が『八教大意』を参照していたことを伺わしめる。

また湛然の『金剛鉅論私記』には、真如隨緣、無情仏性、など湛然の重要な教理が、述べられているが、『八教大意』には超八醍醐思想以外に湛然教学の目立った影響はない。

また『八教大意』では、十乘観法を述べるに際しても、藏・通・別・円の四教それぞれのもとに説明をするという特色があるが、『諦観録』はこれを採用せず、最後に一括して論じている。

さらに四弘誓願の第三「法門無盡誓願知」を述べるに際しても「達惑即智則法門無盡誓願知」として煩惱即智慧に

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

達することであると理解する。これは湛然の『止観大意』の説であり、明曠の『菩薩戒疏』にも引用されているが、⁽³³⁾『諦観録』には「法門無盡誓願知」について『八教大意』のような説明はない。⁽³⁴⁾

3 『諦観録』と『八教大意』構成図式

『諦観録』

1 総叙五時八教

2 正明五時八教

(1) 五時五味・化儀四教

① 前四時・化儀四教

1 頓教―華嚴時

2 漸教―鹿苑時

方等時

般若時

3 秘密教

4 不定教

② 法華涅槃時―法華經

『八教大意』

1 総叙五時八教

2 正明五時八教

(1) 五時五味・化儀四教

① 前四時・化儀四教

1 頓教―華嚴時

2 漸教―鹿苑時

方等時

般若時

3 法華涅槃時―法華經（非頓漸）

4 秘密教

5 不定教

涅槃經

③五味

(2)化法四教

①教理

1 三藏教—积名

教義

三乘行位

2 通教—积名

行位

藏通二教同異

結示通当教義

3 別教—积名

行位

隨機不定

(2)化法四教（総説）

①教理

1 三藏教—积名

教義

三乘行位

2 通教—积名

行位

藏通二教同異

結示通当教義

3 別教—积名

行位

隨機不定

十乘觀法

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

4 円教一釈名

4 円教一釈名

行位

行位

六即判位

六即判位

十乗観法

四教五味

② 依教修行

1 方便（二十五方便）

2 正修（十乗観法）

3 総結

3 総結

となっている。『八教大意』と『諦観録』との構成は、『八教大意』が四教のそれぞれに十乗観法を述べるのに対して、『諦観録』は、②依教修行の項に纏めているところと違いがあるものの、ほとんどの構成が一致するから、諦観は明らかに『八教大意』を骨格として『天台四教儀』を著したことがわかる。

4 『八教大意』の四門十乗

『八教大意』は蔵通別円の四教をそれぞれ、有門・空門・亦有亦空門・非有非空門として、それぞれに十法成乗（十乗観法）を明かしている。以下に『八教大意』中の十乗の名称の対応関係を図示すると、

藏教	通教	別教	円教
一 明所觀之境。	初明觀境	初明境	一 觀不思議境
二 真正發心	二明發心	二明發心	第二發真正菩提心
三 遵定慧	三安心定慧	三安心	三 巧安止觀
四 破法遍令	四破法遍	四破法遍	四 破法遍
五 知通塞	五識通塞	五識通塞	五 識通塞
六 道品調適	六道品調適	六道品調適	六 道品調適
七 修對治	七對治	七對治助開	七 對治助開
八 識次位	八識次位	八知次位	八 知次位
九 善修安忍	九令安忍	九安忍	九 能安忍
十 無法愛	十速令內	十無法愛	十 無法愛

となつてゐる。さらにこれらの説明を四教に分類して整理してみると、

① 所觀の境 () 内は『法華玄義』

藏教 一明所觀之境。即是識正無明因緣生一切法也。故大論云。色若龜若細總而觀之。無常無我悉是顛倒。如阿毘曇廣說。不同外道計微塵世性及自然等。〔八教大意〕大正藏 46.770b)

(一明所觀境者。即是識正無明因緣生一切法也。若謂世間苦樂之法。從毘紐天生。或言從世性生微塵生。皆邪因

『天台四教儀』と『天台八教大意』(三友)

緣生。若言自然法爾無誰作者。此無因緣生。無因緣生。是破因不破果。邪因緣亦是破正因果。是等悉非正因緣境。所不應觀。數存隣虛論破隣虛。此與邪無相濫。殆非正因緣境。何者。隣虛有無未免二見。猶是無明顛倒。倒故是集。集故感龐細等色。無明顛倒既其不實。所感苦果報。那得定計有無。故大論云。色若龐若細總而觀之。無常無我。無我故無主。若龐若細若因若緣。若苦若集若依若正。皆無常無主。悉是無明顛倒所作。如阿毘曇門廣說。是名識正因緣所觀之境。不同外道邪無因緣也。』〔法華玄義〕大正藏33785c)

通教 初明觀境。即六道陰入。能觀所觀皆如幻化。』〔八教大意〕大正藏46771a)

別教 初明境者。緣於登地中道妙有之境。而為所觀局出空有之表。』〔八教大意〕大正藏46771c)

（一觀境者。超出凡夫四見四門外。亦非二乘四門法。亦非通教四門法。諸四門法為境。不名實相。非生死涅槃如來藏者。乃名為妙有有真實法。如此妙有。為一切法而作依持。從是妙有出生諸法。是為所觀之境也。）〔法華玄義〕大正藏33787b)

円教 一觀不思議境者。觀一念所具之心。即無作四諦達此具心無非眾生。生佛一如涅槃無二。即苦滅諦不可思議。

達此具心無非煩惱。煩惱即般若即集道諦不可思議。惑智相即因果寧殊。一一無非空假中。境即空故方便淨。即假故圓淨。即事故性淨。三淨一心中得名大涅槃。故淨名云。一切眾生即大涅槃名不思議境。境法非一名廣。無非實相名高。故法華云。其車高廣。』〔八教大意〕大正藏46772c)

（不思議境即是一實四諦。謂生死苦諦不可思議。即空即假即中。即空故方便淨。即假故圓淨。即中故性淨。三淨一心中得名大涅槃。淨名曰。一切眾生即大涅槃。故名不可思議四諦也。不可復滅。此即生死之苦諦。是無作之滅。亦是集道也。煩惱集諦不可思議。即空即假即中。即空故名一切智。即假故名道種智。即中故一切種智。三智一心

中得名大般若。淨名曰。一切眾生即菩提相。不可復得。此即煩惱之集而是無作道諦。亦是苦滅。故名不思議一實四諦也。亦是真善妙色。何者。生死即空故名真。生死即假故名善。生死即中故名妙。此名有門不可思議境也。)
『法華玄義』大正藏33,789c)

② 發心

藏教 二真正發心者。既識無明乃至老死。正求涅槃發三乘心。出離見愛不要名利唯志無餘。〔八教大意〕大正藏46,771a)

(二發心真正者。既識無明顛倒流轉行識乃至老死如旋火輪。欲休息結業正求涅槃。發二乘心出離見愛。不要名利但破諸有。不增長苦集。唯志無餘。其心清淨不雜不偽。此心真正名正發心。不同外道天魔也)〔法華玄義〕大正藏33,785c)

通教 二乘緣真自行。菩薩體幻兼人與樂拔苦譬於鏡像。〔八教大意〕大正藏46,770b)

別教 二明發心緣。此妙有起四弘誓。故華嚴云。菩薩不為一人一國一界微塵人。乃為法界眾生發菩提心也。〔八教大意〕大正藏46,771c)

(二明發心者。菩薩深觀實相妙有。不為生死所遷。金藏草穢額珠鬪沒。貧窮孤露甚可愍傷。菩薩為此起大慈悲四弘誓願。思益有三十二大悲。華嚴云。不為一人一國一界微塵人。乃為法界眾生發菩提心。如是發心有大力。如師子吼。既發心已)〔法華玄義〕大正藏33,787b)

円教 第二發真正菩提心者。緣前實境起四弘誓。緣前若境誓度眾生。故法華云。未度者令度。緣前集境誓斷煩惱。

故法華云。未解者令解。達惑即智則法門無盡誓願知。故法華云。未安者令安。生死即涅槃則佛道無上誓願成。故法華云。未得涅槃者令得涅槃。四諦是所緣之境。四弘是能發之誓。誓若無境名為狂願。境不發誓名為頑諦。依諦發心離於邪小偏偽之過。故名真正。故法華云。又於其上張設幟蓋等。『八教大意』大正藏46(732a)

（二發真正心者。一切眾生即大涅槃。云何顛倒以樂為苦。即起大悲興兩誓願。令未度者度。令未斷者斷。一切煩惱即是菩提。云何愚闇以道為非道。即起大慈興兩誓願。令未知者知未得者得。無緣慈悲清淨誓願。慈善根力。任運吸取一切眾生也。）『法華玄義』大正藏33(787b)

③安心

藏教 三遵定慧者既誓求出有。依木又住修道。但遮障紛馳道。何由剋為修四念學五停心。破五種障名停。事觀名定念處即慧。慧定均停故名安心。『八教大意』大正藏46(770b)

（三遵修定慧者。行人既誓求出有依波羅提木又住修道。但罪障紛馳心不得安。道何由剋。為修四念處。學五停心破五種障。五停事觀即是定。定生念處即慧。慧定均停故名安心。又定慧調適故名停心。若無定慧若單定慧。若不均調定慧。皆不名賢人。如世間賢人智德具足。智則靡所不閑。德則美行無缺。許由巢父乃可稱賢。若多智寡德名狂人。多德寡智名癡人。狂癡皆非賢也。賢名賢能亦名賢善。善故有德能故有智。智德具足故稱賢人。行者亦爾。修四念處慧學五停心定。定慧具足。云何數息具足定慧制諸覺散。從一至十知息及數。無常生滅念念不停。又若觀不淨。當深厭穢惡。能觀所觀無常生滅。速朽虛誑諸眾生。厭觀起悲須慈定相應。見他得樂。亦知此定及彼樂相無常生滅因緣。觀時橫觀四生。悉是因緣生法。豎觀三界亦是因緣生法。從緣生者悉是無常無我。諸障起者應須念

佛亦如是。是名五停具修定慧。有定故不狂。有慧故不愚。依此安心為眾行基址。發生煥頂入苦忍真明。隣聖為賢義在於此。不同外道不知鑽搖繫猶難得。況復酪蘇等也。)(『法華玄義』大正藏33,786a)

通教 三安心定慧前。雖止觀並空如空。而安二法。(『八教大意』大正藏46,771a)

別教 三安心者。既發心已安心進行。修諸定慧定愛慧策耳。(『八教大意』大正藏46,771c)

(安心進行。如前所說種種定慧。如是時中。宜應修如是定。如是時中。宜應修如是慧。定愛慧策安心修道。依止二法不餘依止。是為安心法也。)(『法華玄義』大正藏33,787b)

円教 三巧安止觀者。體境法界法界寂然名止。止即定也。寂然常照名觀。觀即慧也。此即總安。若分止觀逗四悉機名為別安。若總若別無非圓觀故名善巧。故法華云。安置丹枕即車內枕也。(『八教大意』大正藏46,773a)

(三安心者。既體解成就發心具足。豈可臨池觀魚。不肯結網。裹糧束脚安坐不行。修行之要不出定慧。譬如陰陽調適萬物秀實。雨旱不節焦爛豈生。若兩輪均平是乘能運。二翼具足堪任飛升。體生死即涅槃名為定。達煩惱即菩提名為慧。於一心中巧修定慧。具足一切行也。)(『法華玄義』大正藏33,790a)

④破法遍

藏教 四破法遍令見有得道。以無常等慧遍破見愛也。(『八教大意』大正藏46,770b)

(四破法遍成見有得道。其安心定慧。若五停心後。修共念處時。帶不淨等遍破諸法。事理悉成。若五停心後。單修性念處時。一向理觀以無常之慧。遍破諸見。破見之觀。如中論下兩品所明也。佛初轉法輪不說餘法。但明無常。

遍破一切外道。若有若無。乃至非有非無。神及世間常無常等。六十二見。使得清淨。今阿毘曇師受他破云。無常

是小乘。常是大乘。常得破無常。無常不得破常。若得前意此不應然。未得道前執心所計。常無常亦常亦無常。非常非無常等。法塵對意根而生諸見。見從緣生。從緣生者悉是無常。云何外道有常樂我淨。如是四倒悉用無常破之。故五百比丘語達兜言。但修無常可以得道。可以得通。如六群比丘為他說法。純說無常。當知。見無深淺悉為無常。

所破不同舊醫純用乳藥也。)(『法華玄義』大正藏33,786b)

通教 四破法通用幻化之慧。破幻化見思。(『八教大意』大正藏46,771a)

別教 四破法遍者。用妙有慧遍破空有也。(『八教大意』大正藏46,771c)

(還以妙有之慧遍破生死一切諸見。六十二等功德黑闇。皆悉不受。遍破涅槃沈空取證。猶如大樹不宿怨鳥。)(『法華玄義』大正藏33,787b)

円教 四破法遍者。以圓三觀遍破三惑。惑智俱圓一心中破名破法遍。故法華云。其疾如風。(『八教大意』大正藏46,773a)

(四破法遍者。以此妙慧。如金剛斧所擬皆碎。如無翳日所臨皆朗。若生死即涅槃者。分段變易若諦皆破。若煩惱即菩提者。四住五住集諦皆破。雖復能破亦不有所破。何者。生死即涅槃故無所破也。)(『法華玄義』大正藏33,790a)

⑤知通塞

蔽教 五知通塞者。前雖知見等是過未見其德。過即是塞。德即是通。通謂道滅無明滅等。及於六度塞即集因緣生等。及於六蔽節節檢校是通須護塞。即須破。(『八教大意』大正藏46,770b)

(五知通塞者。前雖遍破諸見之過。未見其德。過即是塞德即是通。若有見中八十八使。乃至非有非無。不可說見

中八十八使。悉從緣生名之為塞。塞故須破。復識其通者。所謂有見中道滅。乃至非有非無不可說見中。道滅如是。道滅從因緣生名之為通。通何須破。若不識諸見。謂是事實餘妄語。執見成業愛潤感果。豈非塞耶。能於諸見。一皆知無常顛倒。不生計著。不執則無業。無業則無果。如是達者則有道滅。豈不名通。不同外道如蟲食木是蟲不知是字非字也。) (『法華玄義』大正藏33:786b)

通教 五識通塞。雖知苦集十二緣生及六蔽等。皆如幻化。亦以幻化道滅十二緣滅及六度等。通之節節檢校皆如幻化。(『八教大意』大正藏46:771a)

別教 五識通塞者。次第二觀為通見思塵沙無明為塞。傳傳檢校是塞令通耳。(『八教大意』大正藏46:771c)

(於一一法中明識通塞。如雪山中備有毒草亦有藥王。菩薩須知。如此心起。即是六道苦集名為塞。如是心起。即是二乘道滅名為通。又如心起。是二乘苦集名為塞。如是心起。是菩薩道滅名為通。如是心起。名為菩薩苦集。

如是心起名佛道滅。於苦集中。能知非道通達佛道。能知佛道。起於壅塞了了無滯。是為識通塞。) (『法華玄義』大正藏33:787c)

四教 五識通塞者。苦集無明見思塵沙為塞。道滅無明。滅即空即假即中等為通。是通須護有塞須破。於通起塞亦復如是。節節檢校名識通塞。即車外枕也。(『八教大意』大正藏46:773a)

(五識通塞者。如主兵寶取捨得宜。強者綏之弱者撫之。知生死過患名為塞。即涅槃名為通。煩惱亂名為塞。即是菩提名為通。始從外道四見乃至圓教。四門皆識通塞。節節執著即是塞。節節亡妙名為通。若不識諸法夷嶮。非但行法不前。亦亡去重寶也。) (『法華玄義』大正藏33:790a)

⑥ 道品調適

蔽教 六道品調適。既識通塞進修道品。所謂觀身不淨觀受是苦。觀心無常觀法無我。勤修念處名四正勤。定心中修名四如意。五善根生名五根。根增長名五力。定慧調停名七覺。安隱道中行名八正。若一停作三十七品。餘停心亦如是。此三十七是行道法。將入無漏城有三門。謂空無相無作。苦下空無我二行為空門。集道各四及苦下苦無常十行為無作門。滅下有四為無相門。故知三乘莫不依諦。（『八教大意』大正藏46:770b）

（六善修道品者。豈唯識此通塞而已。當修道品進諸法門。謂觀此有見乃至不可說見。皆依於色污穢不淨。即身念處。若受有受。乃至受不可說受。皆依三受。受即是苦名受念處。觀於諸見所起想行。悉是無我。名法念處。觀諸見之心。念念無常名心念處。觀此四觀名有為法中得正憶念。得是念故四倒則伏。是名念處。勤修四觀名四正勤。定心中修名四如意。五善根生故名五根。五根增長遮諸惡法。故名五力。定慧調停名七覺分。安隱道中行名八正道。今非約位道品。但就通脩論三十七耳。若一停心門。作三十七品。餘停心亦如是。阿毘曇道諦中。應廣分別（云云）。此三十七品是行道法。將至涅槃城有三門。所謂苦下二行為空解脫門。集道各四。苦下有二。是無作解脫門。滅下有四是無相解脫門。若涅槃門開即得入也。故佛於須跋陀羅經中。決定師子吼。唯我法中有八正道。外道法中尚無一道。何況八道耶。（『法華玄義』大正藏33:786c1）

通教 六道品調適者。以不可得心修三十七品也。

別教 六道品調適者。三十七品是菩薩寶炬陀羅尼。念處破倒正勤如意。能生五根力必增長七覺八正。定慧均平入三解脫門證中無漏。（『八教大意』大正藏46:771c）

（善修道品者。夫三十七品。是菩薩寶炬陀羅尼。破倒念處勤行定心。五善根生能排五惡。定慧調適安隱道中行。

離十相故名空三昧。亦不見空相。名無相三昧。不作願求名無作三昧。是行道法近涅槃門。若修諸法對治之門。所謂常無常恒非恒。安非安為無為。斷不斷涅槃非涅槃。增上非增上。)(『法華玄義』大正藏33,787c)
円教 六道品調適者。無作七科一一調試。隨宜而入。四念為本雙非枯榮。餘品例之無非中道名道品調適。故法華云。有大白牛等。)(『八教大意』大正藏46,773a)
(六善識道品者。觀生死即涅槃。十界生死色陰。皆非淨非不淨。乃至識陰非常非不常。能破八顛倒。即法性四念處。念處中具道品三解脫及一切法。又知涅槃即生死。顯四枯樹。知生死即涅槃。顯四榮樹。知生死涅槃不二。即一實諦。非枯非榮住大涅槃也。)(『法華玄義』大正藏33,790a)

⑦對治

藏教 七修對治者。若利人即入。鈍人不入當修助道。故論云。貪欲心起教修不淨。及背捨等為助。無常析觀歸真為正。)(『八教大意』大正藏46,770b)

(七善脩對治者。若利人即入。若不入者當修助道。故論云。十二禪等悉是助開門法。正慧既弱遮障得起。修助道為援。論云。貪欲起教修不淨背捨等。緣中不自在。當教勝處。緣中不廣普當教一切處。若少福德當教無量心。若欲出色當教四空。如是等悉是助道。助開門法不同外道於根本禪起愛見慢也。)(『法華玄義』大正藏33,786c)

通教 七對治者。體三藏法無常苦空如幻而治。

別教 七對治助開者。用前藏通助開妙有實相中道。

(常樂觀察諸對治門。助開實相也。『法華玄義』大正藏33,787c)

『天台四教儀』と『天台八教大意』(三友)

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

円教 七對治助開者。若正道多障圓理不開。須修事。助事即五停及三藏六度等事成理顯。事理咸如名為合行。故法華云。又多僕從等。

（七善修對治者。若正道多障應須助道。觀生死即涅槃。治報障也。觀煩惱即菩提。治業障煩惱障也。『法華玄義』大正藏33:790a）

⑧識次位

藏教 八識次位者。雖修正助等法明識。真似階降不同。令無上慢。

（八善識次位者。雖修如此正助等法。不得即言我是聖人。叨濫真似不識賢聖。今明識真似階差。自知非聖。增上之慢則不得生。不同外道戒取見取計生死法以為涅槃也。『法華玄義』大正藏33:786c）

通教 八識次位者。了乾慧等十地因果。三人殊途而不謬濫。

別教 八知次位者。善達七位終不謂我叨極上聖。

（從初十信十住十迴向十地等覺妙覺聖位深淺。悉知無謬。終不謂我叨極上位。內忍善惡兩覺。違從二賊外忍八風。『法華玄義』大正藏33:787c）

円教 八知次位令無上慢。

（八善知次位者。生死之法本即涅槃。理涅槃也。解知生死即涅槃。名字涅槃也。勤觀生死即涅槃。觀行涅槃也。善根功德生。即相似涅槃也。真實慧起。即分真涅槃也。盡生死底。即究竟涅槃也。觀煩惱即菩提亦如是。『法華玄義』大正藏33:790b）

⑨安忍

藏教 九善修安忍。總修四念入於煖法似道煙生。若不安忍不至煖頂。頂法退為五逆。煖退為一闡提。忍世第一後入真無漏。由能安忍內外諸障。

(九善修安忍。別相念處力弱。未甚通泰。轉修總相念處。或總一總二乃至總四。是時應須安忍。使諦觀成就。轉入煖法似道煙生。大經云。煖雖有漏有為。還能破壞有漏有為。我弟子有外道則無。又若安忍即成頂法。頂法成名忍。到傍邊如其不忍。則退還此邊。故云頂法退為五逆。煖法退為闡提。是故此中。善須安忍內外諸障。不同外道。不能安忍細微遮法也。『法華玄義』大正藏33:787a)

通教 九令安忍乾慧外凡內外諸障而入性地。

別教 九安忍者。策十信位入於十住。令離違順強軟二賊。

(以忍力故不為傾動。『法華玄義』大正藏33:787c)

円教 九能安忍策進五品而入十信。

(九善安忍者。能安內外強軟遮障。不壞觀心。若觀生死即涅槃。不為陰入境病患業魔禪二乘菩薩等境所動壞也。若觀煩惱即菩提。不為諸見增上慢境。所動壞也。『法華玄義』大正藏33:790b)

⑩無法愛

藏教 十無法愛者上安忍。策進外凡令入內凡。令無法愛策內凡位。而入見諦斷於見惑。或超或次得成無學。利人節節得入。鈍人具乘至十。阿毘曇中所明雖廣不出十意。名為十法成乘。

『天台四教儀』と『天台八教大意』(三友)

（十法愛不生者。上來既得四善根生。若起法愛。雖不退為五逆闡提。而不得入見諦。是則三番縮觀。進成上忍世第一法。發苦忍真明。十六剎那得成初果。或成超果。或重用觀斷五下五上。得成無學。若利人用觀節節得入。若鈍用觀具來至十。阿毘曇中。雖復廣解不出十意。五百阿羅漢作毘婆沙。正申有門得道。云何而言是調心方便。四門調適俱能得道。若生取著俱不得道。若但云見有得道見空不得道。云何異於外人。故大論云。若不得般若方便。則墮有無。今以十法為方便直入真門。永異外道也。是為有門入真之觀也。『法華玄義』大正藏33787a)

通教 第十速令內凡性地。不著相似法愛。而入八人見地證真餘三門亦如是。廣如大本通教竟。

別教 十無法愛者。策三十心令人入地。若愛相似之法名為頂墮。餘三門亦如是。廣如大本。別教竟。

（設證相似之法法愛不起。不墮菩薩頂生名法愛。無是愛故即入菩薩位。破無明穢草。顯出妙有金藏得見佛性。入於實相。是為有門修入實觀也。餘空門亦空亦有門非空非有門。入實之觀例亦為十。諸門方便雖各不同。俱會圓真理無差二三門觀法準有可知。不復委記（一云）。大正藏33787c)

円教 十無法愛策於十信入證初住。故經總譬乘是寶車遊於四方。乃至直至道場等。故知中下修觀十法。具須上根體境含諸。或一二三不定。內外作受無不咸然。大車無量言豈徒設。以法對譬出自一家。本迹所歸圓理無二。不別而別。位位增明廣如餘文。非此可具依文判義。若四若八目擊道存。更引涅槃證成其理。

（十無法愛者。既過障難道根成立諸功德生。觀生死即涅槃。故諸禪三昧功德生。觀煩惱即菩提故。諸陀羅尼無畏不共諸般若生。觀生死涅槃不二。故法身實相生。相似功德順理而生。喜起順道法愛生名愛法。不上不退名為頂墮。此愛若起即當疾滅。愛若滅已破無明。開佛知見證實相體。觀生死即涅槃。故證得解脫。煩惱即菩提故證得般若。此二不二證得法身。一身無量身。無上寶聚如意圓珠。眾法具足。是名有門入實證得經體。餘三門亦如是。是十種

觀經文具足。是法不可示言辭相寂滅。諸餘眾生類無有能得解。又我法妙難思。即不思議境。於一切眾生中起大慈心。於非菩薩中起大悲心。我得三菩提時。以神通力智慧力引之。令得住是法中。即正發心也。佛自住大乘。如其所得法定慧力莊嚴。即是安於二法。自成成他也。破有法王即是破法遍也。又如日月光明能除諸幽暝。斯人行世間。能破眾生闇。即破法遍也。有一導師將導眾人明了心決定在嶮濟眾難善知通塞也。淨藏淨眼。善修三十七品諸波羅蜜。即是兩意也。增道損生遊於四方。即是識次位也。安住不動如須彌頂。著如來衣。即安忍也。雖聞是諸聲聽之而不著。其意等六根。皆言清淨若此。又云。真淨大法即無法愛也。是十種觀散在經文。而人不知。今撮聚十數入有門為觀。乃至三門小異大同。十觀入實亦復如是。復次此十觀意非但獨出今經。大小乘經論備有其意。如摩黎山純出栴檀。固非外道四韋陀典。及此間莊老之所載也。世人咸共講讀。而對文不知。若欲學道全無方便悲夫。徒知「穀一禾十牛」掇不解鑽搖。若識十意。於小乘四門俱用入真。於大乘四門俱用入實。既入實已如食乳糜。更無所須。半如意珠全如意珠。布施一切。雖有此施不見有人輕生重道。勤心修習不受不用。徒施何益。我則悔焉。雖無所益作毒鼓因。欲具知之委如止觀(云云)。

天台教理が、諸教のうちでも法華の優れていることをいわんとするものであれば、藏教などの三教の十乘觀法を敢えて説明する必要もないのに、この『八教大意』は、全体の四分の一の文章を使って四教それぞれの十乘觀法を述べているのは、『摩訶止觀』に四種の止觀はすべて真実であり、声聞の法を決したものの諸教の王であり、いずれもみな円教に入るといふ考え方を採用しているからである。しかしながら、四教のそれぞれの説明は『摩訶止觀』には出てこない。『摩訶止觀』に「法華疏中應廣説」とあるように、『法華玄義』に説明を譲っており、『法華玄義』のそれぞ

れの説明を参照したのが、（一）内の文章である。

このように『八教大意』は『法華玄義』から四教それぞれの説明を引用するのであるが、『法華玄義』によると、通教は他の三門と大同小異だから煩雑を避けて省略するとしている。⁽³⁷⁾それゆえ、『八教大意』の著者は通教に関して、『法華玄義』のなかからまとまって引用することができなかったことになる。そのほか、智顛は煩惱即菩提を円教の特色とするのだが、『八教大意』では、六即の理即で述べるくらいで、あまり積極的には述べていない。

『八教大意』には、明曠の作とする『金剛錍論私記』に出てくる「一炷之燈」、⁽³⁸⁾「理即佛性」⁽³⁹⁾などの要語に明曠独自の特殊な用例をみることができるところから、『八教大意』と『金剛錍論私記』との両書に明曠が関与していることは間違いないであろう。ところで『諦観録』を詳細に検討してみると、諦観は『四教儀』の文中で、「『涅槃経』では一心五行を明かす」としているが、『涅槃経』には五行はあっても「一心五行」はないし、『法華玄義』や『法華文句』などにはあっても、この典拠を『涅槃経』とする記述はない。諦観の言う「『涅槃経』では一心五行を明かす」は、『八教大意』（大正蔵40772a）だけにみられるから、諦観は、『八教大意』によって述べていることがわかる。しかしながら、諦観はこの『八教大意』だけによったのではなく、ひろく『法華玄義』などに当たっており、その点では『便蒙』のいうとおり、『佛祖統紀』の志盤が、『諦観録』も『八教大意』もよく読んでいなかったために、諦観が湛然の功績を無視しており怪しからんとして批判したことになる。

天台教学を一口でいうならば、釈尊一代の教化を『法華経』という円教に基づいて順序立てた教学といえる。その「円教」とは、釈尊の真精神をあきらかにした完全円満なる教えということである。諦観の『天台四教儀』は、教義に関して、まさにその根本的立場のもとで述作された『法華玄義』の要略版であり、修行論は『摩訶止観』の基本的

なところを取り上げて天台教学の基礎となしており、多くのひとびとに学ばれ、天台学の入門書として、これにまさる書はない。しかしながら、関口真大氏によって「五時八教判は天台教学に非ず」という発表があり、天台の五時八教判をもって教学を樹立している日蓮宗系におおきな衝撃を与えたのみならず、学界も大きく動揺した。

関口氏は、天台三大部には「五時八教」ということがなかったところから、天台学研究が天台三大部を讀まずに諦観の『天台四教儀』をもって足れりとする偏重を戒めることが主意であつたとおもわれる。「五時八教」ということが天台三大部になくとも、智顛撰の『維摩經玄疏』には、化儀・化法の四教に該当する藏教・通教・別教・円教、頓教・漸教・不定教・秘密教の用法と定義が明確に出ているから、関口氏の所論はあたらな⁽⁴⁰⁾い。

さて、法華円教が目指していたところは、何だつたのだろうか。『摩訶止観』は善惡の基準について「善惡は定まつたものではない。諸種の弊害を惡とし、それを克服することを善と認めるのであるが、人天もその報いが尽きれば三途に墮ち、その善も惡に変わつてしまふ。なぜならば弊害と克服とはともに動出するものではなく、その本体はみな惡である。たとえば二乗は苦から出ることを善とするが、二乗にとつては善であつても自分のことだけであるから、善人のすがたとはいえない。『大智度論』には質の悪い病氣や狐のころを起こしても二乗のころを生ずるなど説かれている。それゆえ、二乗の生死も涅槃もともに惡だということになる。六波羅蜜を行ずる菩薩が慈悲のころで自他ともに救うことは勿論善である。しかしながら毒の器に食事を盛ればひとを殺める^やように惡となることもある。なぜならば三乗がおなじく煩惱を斷ずることは良いことではあるけれども、それを越えた別教の真理が見られなければ、三界内の藏教・通教のように事と理に偏つた見解に陥ることになる。またこの別教の理を見ることが善であるとはいつても、別教の理はなお方便を帶しており、無明の惑という毒をすべて吐き出していないから惡である。円教は実相を

説き、性善性悪は不二同体であるから、諸の悪は悪に非ず、皆これ実相であると達すれば非道も仏道となすことができるが、これも仏道に執著を生ずれば道も非道となる。」（『摩訶止観』大正蔵4617b）とし、善悪二元論を越え真如実相論に立脚した『法華経』の思想こそが重要だとしている。しかも純円独妙である『法華経』理解も、即空即仮即中を忘れ、狐疑こぎ執著した偏見に陥れば、かえって邪見となり悪となると警めている。神と悪魔、善と悪という対立した外道の二元論は、どちらか一方を殲滅せんめつしないかぎり、安息の日はやってこないという危険思想に直結し、神の祝福を受けられる選民と非選民との対立による価値観は、人間と人間に奉仕すべき動物という二元論を生み、世界を不幸のどん底に陥れてきたことは世界の歴史が如実に物語るところである。しかし、この法華円教も、円熟した哲学思想としての理解で終わってしまったならば、智顛が最も怖れていた「文字もんじの法師ほっし」を生むだけになってしまふ。『法華玄義』、『法華文句』の教理思想をただしく理解したうえで、『摩訶止観』に説かれる戒定慧の仏道修行の実践を通じた天台教学の理解こそが法華円教の会得となるのである。たまたま宿世の善根が熟して法華円教に触れるものであっても思考を停止した盲信は「闍証の禪師」となることを忘れてはならない。教判が千々に乱れ、おのれの教理こそ一番だと固執していたそれ以前の教判論を、智顛は独自の五時八教の分類によって整理し、『法華経』開会の思想こそ諸仏成道の原点であり、仏教本来の目的を成就する唯一の教えであるとしたものである。すなわち法華円教の真理は普遍であるとし、本門開顕の本仏として諸仏を統合することにより、大乘仏教の精華『法華経』が世に現れわれなければならなかった意義を見出したところに天台教学の重要性がある。『諸観録』が天台教学者に果たしてきた役割は計り知れないものがあると言わなければならない。

注

(1) 『仏祖統紀』(大正蔵99.206b)は、諦観録を湛然の『八教大意』を加筆修治したものとす。『八教大意』と『諦観録』との問題については、すでに池田魯參氏が詳細な検討をしている(池田魯參「諦観録『四教儀』序説」『駒澤大學佛教學部研究紀要』第三四号)。また『八教大意』について日本の継天の『天台八教大意便蒙』(1760刊行)は多くの根拠をあげて明曠の作とし、近年、『八教大意』湛然著作説に疑義を唱え、明曠の作としている(上杉文秀『日本天台史』(統)七六八頁、中里貞隆論文「荆溪湛然門下と其の著書」『山家字報』第9号19頁以降、池田魯參前掲論文)。たしかに「一炷之燈」、「理即佛性」などに明曠独自の特殊な用例をみることができるところから、明曠が関与していることは間違いないであろう。また、諦観は『四教儀』の文中で、『涅槃經』では一心五行を明かす」としているが、『涅槃經』には五行はあっても「一心五行」はないし、『法華玄義』や『法華文句』などにはあつてよつて述べていることがわかる。これらについては、本文中で検証することとする。なお、本論文中引用の文献はCBETAによるものである。記して遷化された聖嚴法師の学恩に衷心より感謝の意を表す。

(2) 述曰。吳越王杭海取教。實基於同除四住之語。及觀師製四教儀。至明圓教中故特標永嘉云者。所以寓當時之意。俾後人無忘發起也。此書即荆溪八教大意。觀師略加修治。易以今名。沒前人之功。深所不可。(『仏祖統紀』大正蔵99.206b)

(3) 『仏祖統紀』(大正蔵49.189ab)

(4) 『仏祖統紀』(大正蔵49.202a)

(5) 禪師明曠。天台人。依章安稟教觀。廣化四眾專誦法華。章安撰八教大意。師首於三童寺錄受。平時著述甚多。今所存心經疏耳。(大正蔵46.202a)

(6) 章安旁出家(旁出之)(二世)龍興弘景禪師 南岳大慧禪師 嘉祥吉藏禪師 天台明曠禪師 玉泉道素禪師。(大正蔵49.201a)。五祖章安大禪師 法華智威禪師、龍興弘景禪師、南岳大慧禪師、天台明曠禪師、嘉祥吉藏禪師、耆山智拔禪師(『仏祖統紀』大正蔵49.251a)

(7) 『伝教大師将来台州録』(大正蔵55.1055bc)、『天台宗章疏』(大正蔵55.1136b)と、『摩訶止観八教大意』とし、『菩薩戒疏』の代わりには、『梵網疏』一卷とする。また『東域伝灯目録』(55.1149b)では、『観音品偈科文』一卷を加えている。これらの問題については、松森秀幸氏「湛然述『法華經大意』の研究」に中里貞隆氏、塩入亮忠氏、日比宣正氏、Linda Penkower氏の意見を紹介している。

『天台四教儀』と『天台八教大意』(三友)

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

- (8) 続蔵56:490b
- (9) 上杉文秀『日本天台史』続198頁
- (10) 『仏書解説辞典』「天台八教大意」
- (11) 宝永年間に、乙が付くのは、乙酉の宝永2年（1705）のみであるから、この間違いか。
- (12) 有天竺寺慈雲遺式法師。是天台教觀之名匠。弘通淨教。依行被物。〔淨土法門源流章〕大正蔵84:195c）とあるも、『教観目録』が如何なる目録であるかは不明。
- (13) 大正蔵55:1178a
- (14) 大正蔵55:1178a
- (15) 『八教大意』には「三童寺」とある（大正蔵46:773c）。
- (16) ただし、このような定義や論述は『八教大意』にはない。
- (17) 『八教大意便蒙』（上、9紙左）も、このことを指摘している。
- (18) 究竟佛性理同故即。事異故六。故名六即。〔八教大意〕大正蔵46:772c、理同故即。事異故六。『止観大意』（46:459c）、理如故通事異故六。〔菩薩戒疏〕大正蔵40:601c）
- (19) 『八教大意便蒙』（下、35紙右）
- (20) 池田前掲論文 p.123f.
- (21) 『法華玄義』（大正蔵33:801a）
- (22) 法華涅槃非頓漸攝。開前頓漸歸會佛乘。約警次第名醒醐味。故涅槃云。從摩訶般若出大涅槃合於法華。譬從熟酥出醍醐味。故迦葉領解云。臨欲終時而命其子等即第五味也。餘之六教遍在漸頓之中。同聽異聞互不相知名祕密教。同聽異聞彼彼相知名不定教。祕密不定名下之法。只是藏通別圓佛世逗機。一音異解從化儀大判且受二名。略明化儀四教義竟（八教大意）大正蔵46:789b）
- (23) 池田前掲論文 p.127
- (24) 湛然の『法華文句記』には「法華一乘非頓非漸攝」（『法華文句記』（大正蔵24:197c））とあるから、確かに湛然の超八醍醐思想を受けていることは明確である。またこの言葉は、おなじく明曠作とされる『金剛鉾論私記』にも「法華圓會非頓漸攝」（続蔵56:502b）とある。
- (25) 池田前掲論文 p.125,128

- (26) 『俱舍論』(大正藏29,95a)
- (27) 『大毘婆沙論』(大正藏27,892c)
- (28) 『輔行』(大正藏46,336a)
- (29) 三人因果大同名為通教(『菩薩戒疏』大正藏40,581b)；此教三乘因果大同故名通教(『八教大意』大正藏46,770c)
- (30) 『八教大意』大正藏46,771a)
- (31) 『諦觀錄』(大正藏46,778a)
- (32) 隨緣等者真如隨緣性體無變如火隨木火性無移全木是性如即佛性。
○五結斥勸信二初譬斥子欲執小道而抗大達者其猶螳螂乎何殊井蛙乎達亦道也螳螂者亦云石蜺亦云蛄蜺丸糞虫也蛙者小蝦蟆也但知井中深廣焉測海之無涯。
○次正勸信二初舉事勸信三初法。
故子應知萬法是真如由不變故真如是萬法由隨緣故子信無情無佛性者豈非萬法無真如耶故萬法之稱寧隔於纖塵真如之體何專於彼我。大智度論云真如在無情中但名法性在有情內方名佛性仁何故立佛性之名。可解。故今問子諸經論中法界實際實相真性等為同法性在無情中為同真如分為兩派。『金剛鍊論私記』統藏56,496a)
- 若信心具真如佛性復疑無情有無無情全是自心則成疑己心之有無也(『金剛鍊論私記』統藏56,495c)
- (33) 『止觀大意』(大正藏46,460b)
- (34) 『菩薩戒疏』(大正藏40,582a)
- (35) 今更料簡四種止觀皆實不虛。所以者何。若不開決則無入理。今決了聲聞法是諸經之王。開方便門示真實相。一一止觀皆得入圓。如快馬見鞭影即得正路。故四種皆實也。又四種皆權。何以故。四理皆不可說。權不可說故非權。實不可說故非實。非權而強說為權。非實而強說為實。等是強說。何意不名權為實耶。以有說故。故皆是權。又此權實悉是非權非實。何以故。皆不可說故。此非權非實。不得異於向實。向以見理為實。實祇是非權非實。此義不異。(『摩訶止觀』大正藏46,34c)
- (36) 『摩訶止觀』(大正藏46,33c)
- (37) 次明通教有門觀者。例為十意。列名(云云)。體解諸法皆如幻化。三人發心。雖同亦有小異(云云)。中論師云。此中是大乘聲聞。今言非也。經云。欲得聲聞緣覺。當學般若。論云。聲聞及緣覺解脫涅槃道。皆從般若得。經論不云是件人師謬耳。雖知定慧不可得。而安心二法。以幻化之慧遍破四見。六十二見及一切諸法。知幻化中苦集名為塞。知幻化中道滅名為通。以不可得心修三十七品。以

『天台四教儀』と『天台八教大意』（三友）

無所治學諸對治。識乾慧地乃至佛地。幻化之慧。不為外魔所動內障所退。諸法不生而般若生。亦不愛著即得入真。若智若斷無生法忍。比前為巧準作可知。不復委記。餘三門十意大同小異。可以意得。亦不煩記文也。〔法華玄義〕大正藏33:295a

(38) 問華嚴經云。初發心住便成正覺。何須更因餘之位耶。答正覺分成名成正覺。非即發心成究竟正覺。譬如闇室分四十二分。一炷之燈即名室明可同於二三乃至四十二炷。若了此喻一成一切成不失。〔八教大意〕大正藏46:772c

問佛成道時土亦成耶成廣狹耶不成有過。二十六者一成一切成一位一切位何隔依正而不能融刹說塵說良由成證彼彼法界廣狹何之仍從化儀立塵刹稱問成通因果四十二位一具一切用餘位為答如一首詩四十二字誦者要須四十二徧方得入心徧徧雖具後後加前一徧咸具四十二字如一成一切成後後方極如須諸位又如闇室大分此闇為四十二品一炷之燈先破一品餘四十一品一分塵闇除故云一破一切破更加一炷破第二品餘四十品明亦隨徧乃至加於四十二炷細闇方盡一破一切破不失因果諸位仍殊約智論成約惑論破智斷不二成破俱時燈生暗滅譬之可解。〔金剛鉅論私記〕統藏56:499a

(39) 理即佛性如理而知。名字佛性如知修觀〔八教大意〕大正藏46:772c。佛性之性者。解理即佛性。佛性即我性故云也〔菩薩戒疏〕大正藏40:592c。

(40) 拙稿「天台における円・頓・漸の教義と教判」〔仏教学論集〕十一、昭和四十九年、関口真大『天台教学の研究』271頁所収、昭和53年。日蓮の『観心本尊抄』にも「それ天台智顛の弘法は三十年で、二十九年間は『玄義』、『文句』等のもろもろの意味を説いて五時八教百界千如を明かした。(夫智者弘法三十年。二十九年之間説玄文等諸義明 五時八教百界千如)」とあって、日蓮教学にとつて五時八教判は智顛の直説であるという認識がある。

(本稿は、身延山大学教授福士慈稔博士から、たつての要望ということで、天台に関する論文を寄稿することになったものであり、福士先生の一日もはやい病気の回復を祈念するものである。)

〔追記〕脱稿したのち、『観山学院研究紀要』第三十六号に金剛大学（韓国）朴昭映・韓・中・日の東アジア三国における『天台八教大意』のあることを窪田哲正博士より御教示いただいた。